

〔櫻之辨〕倭國にて専ら花とは櫻をいふなり、櫻を詠する歌數も亥らず、此花神代よりありけるにや、大山祇の女始て天上より櫻の木に降れりけるとて、木花開耶姫と申侍る、皇代履仲天皇禁池の御舟遊に櫻花の散て御盃に入しを賞して内裏を若櫻の宮と名付玉ふ平城天皇櫻花の御製、昔在幽巖下、花光照四方、忽逢攀折客、含笑亘三陽、送氣時多少、垂陰絲短長、如何此一物、擅美九春場と宣へり、凌雲集に出たり、嵯峨天皇弘仁三年二月に、神泉苑に御幸ありて、茶を御覽じ詩を作らしめ玉ふ、これ花の宴の濫觴なりとぞ、文德天皇仁壽元年に、藤原の良房の館に御幸ありて、櫻花を御覽じ詩歌の御遊あり、宇多天皇寛平七年、神泉苑の櫻を御覽じて、菅丞相供奉なりしかば、かくもてはやし、業平歌に、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心は長閑からまし、といへり、

〔茅窓漫錄〕木花櫻○中略

本より櫻は此邦第一の花にて、漢土にも賞美せり、義楚六帖に日本國都城南五百餘里、金峯山頂上有金剛藏王菩薩、第一靈異、山有松檜名花軟草といふ、金峯山は神名式に見えたる大和國吉野郡金峯神社にて、今は金精明神といふ、名花は、今吉野櫻なり、宋景濂が櫻詩に、賞櫻日本盛於唐、如被牡丹兼海棠、恐是趙昌所難畫、春風纔起雪吹香と作れり、趙昌所難畫といふは、枕草紙に繪に書きて劣る物といふにおなじ、神代木の花櫻より王仁が難波津の詠に入り、歴代帝王の花宴を開き、詩歌墨客の賞美するところ、實に日本第一の木の花なる事しるべし、

〔毘陽漫錄〕花

鶴林玉露に云く、洛陽の人謂牡丹爲花、成都の人謂海棠爲花、尊貴之也と、我國の人は櫻をいひて花となす、これも賞翫するによりてなり、人情はいづくもたがひあらざるなり、

〔日本書紀〕履中三年十一月辛未、天皇泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴、膳臣余磯獻酒、